

『川端康成全集』と NACISIS Webcat

田 坂 憲 二

1

図書館の蔵書を検索するということに関しては、近年長足の進歩を遂げた。

従来のカード型検索は、書名目録が中心であり、これに著者別目録と函架番号別目録、親切なところで叢書内細目目録が別にあるという程度であった。従って、書名や叢書の冒頭を間違えたりするとまず検索できないし、角書きがあったりするとますます面倒である。また蔵書は絶えず増え続けるから、目録カードは不断に追加が必要であり、それをにらんで、新たなカード挿入が可能なスペースを確保する必要があったし、それがうまくいかない場合は、ケースの移動が必要になる。カードをめくるのに苦勞するぐらいにぎっしりと詰まったケースもあった。なによりも一度に一人しか検索できないから、目指す書名のあたりや、番号のあたりのカードを検索している人がいて、その人が終了するまで待ち遠しく思った経験は誰にもあろう。

それが端末方式の検索になってから、図書館側からすればデータの追加も容易になったし、利用者側からすれば限界はあるものの様々な文字列検索も可能になった。端末の数だけ、誰でも同時並行で検索できるというのは特に便利であった。それも、当初は、図書館内に備え付けの端末から、その図書館の蔵書の検索にとどまっていたが、インターネットの急速な普及によって、OPACを通して、現在その場所にいなくても、別の大学や機関の図書館の蔵書を検索できるようになり、利便性は飛躍的に拡大した。国会図書館の蔵書の OPAC による検索などは、その最たるものである。更に特定の大学や機関の蔵書を検索するために、検索可能な機関を一覧できる、JAPAN OPAC LIST (日本国内図書館 OPAC リスト) のようなものが作成されるようになる^(註1)。類似のものは多いが、筆者の乏しい経験では、東京工業大学附属図書館から入って、全国大学図書館 WEB (日本国内の大学図書館関係 WWW サーバ) を利用するのが最も

使い勝手が良いと思われた。

しかし検索という点から言えば、個別検索よりも、横断検索の方が圧倒的に効力を発揮する。古書の分野でも、情報総量という点では、どのように巨大な在庫を誇る古書店でも、日本の古本屋やスーパー源氏のような横断検索の可能な、検索エンジンにはかなわないのと同じことである。その意味で、蔵書検索ということに関しては、国立情報学研究所の総合目録データベース WWW 検索サービスである、NACSIS Webcat の存在は極めて大きい。この総合目録データベースが完備した暁には、正確な書籍情報、それも全国規模のものをたちどころに入手することが出来るようになり、学術研究に寄与することは甚大であろう。個別の図書館の蔵書管理という点から考えても、たとえ一般的な活字出版の図書であっても、所蔵が全国的に稀少になっている図書は、その図書の管理や保存に十二分な配慮をすることが可能になる。大学、図書館、研究者のいずれにとっても、極めて重要なシステムなのである。ただ現在の NACSIS Webcat のデータには、データの集積過程で生じた誤謬が散見する。

一例を挙げれば、『角川版昭和文学全集』^(註2)を Webcat で検索すると、第18巻「宮沢賢治集」のデータのみが二重に出てくる。その二つを個別に詳細表示すると、書籍情報の中のページ数が異なっているために、別データとなってしまったことが分かる。すなわち、この本のページ数を455ページとするのが、慶應義塾、奈良女子大学など16機関、これに対して451ページとするのが、フェリス女学院大学以下の3機関である^(註3)。手許にある、「宮沢賢治集」の1962年8月発行の初版によれば、448ページから455ページまでは年譜であるから、総ページ数は正しくは455ページである。項目の切れ目でもない451ページという情報がどこから来たのかは不明であるが、何か事情があるのかもしれない。ともあれ、この例は、『角川版昭和文学全集』の細目を詳細表示させたときに、「宮沢賢治集」だけが続けて出てくるのですぐに気づきやすいものである。離れて出てきたり、逆にいくつかのデータが合わさって新たな一つのデータになったりする場合は、一見誤りが見えにくいものである。そのために新たな誤解が生じたりする。そのような例を収集し、誤謬の発生する型を分析することによって、より正確な総合目録の構築が可能となるであろう。

本稿は、『川端康成全集』の事例を取り上げて、その一例を考察してみようとするものである。猶、原則として巻数などの数字はアラビア数字に、年号は西暦に、作品名は新漢字に統一した。

最初に、『川端康成全集』そのものについて簡単に見ておく。

川端康成の作品を集めて一つの叢書とした全集や選集として^(註4)、最も早いものは、戦前、1938年に改造社から刊行された全9冊の『川端康成選集』である。林芙美子装幀の普及版と、芹沢銈介装幀の特装版とがある。後者は発行部数も少なく、全冊川端の署名入りであるから、古書価もかなり高価であるので、目録などで目を引くことがある^(註5)。これらは特装版は勿論、普及版を含めても今日では、稀覯本の部類に属すると言っても良からう。この選集を除くと、『川端康成全集』『川端康成選集』と呼ばれるものは、今日まで、4つの全集と1つの選集が刊行されているが、出版社はいずれも新潮社である。これらについて少し具体的に見ておこう。

A 『川端康成全集』全16巻。B 6判。401ページ～451ページ。1948年5月～54年4月。

川端の生誕50年を記念して、新潮社としては戦後初めて刊行した個人全集である^(註6)。刊行期間がやや長期にわたるのは、当初は3か月に1冊の刊行、最後は半年から1年の間隔があることによる。注目すべきは、「紅梅」「染付香合」「秋海棠」「弥勒菩薩思惟」など全巻異なる美しい表紙の絵である。これはすべて安田靫彦の手になるもので、それを更に藍染めの上質和紙でくるみ、金文字で「川端康成全集」と記す。題字も安田のもの。時代を考えると、大変贅沢な装幀であったことが分かる。安田の表紙の原画は、画帖として川端の手許にあったが、1976年の東京国立近代美術館の安田靫彦展に出陳され、同年、複製の『川端康成全集装画帖』として中央公論美術出版から刊行される^(註7)。この全集には、各巻に、川端自身の自作自注ともいうべき、長文のあとがきが付載されているのが貴重である^(註8)。このあとがきは、のちのDの全集では、集成されて「独影自命—作品自解」の総題の下に第14巻に収載されている。

B 『川端康成選集』全10巻。B 6変型判。318ページ～355ページ。1956年2月～11月。

「選集」と銘打っていることもあり、全体の冊数や収録作品も少ないが、本の大きさや厚さも、川端の全集・選集の中では最も小型のもの。他の全集では、必ず抱き合わせになっている『千羽鶴』と『山の音』（Aでは第15巻、Cでは第8巻、Dでは第8巻、Eでは第12巻）が、本選集では、第8巻と第9巻にそれぞれ単独で収載されていることから、一冊の収録規模が想像されよう。一冊の

大きさとしてはおおよそ他の全集の半分ぐらいと考えれば良からう。装幀には女流書家の町春草があたり、各箱に代表的な所収作品名を記すのであるが、全巻異なった書体を駆使して、実に洒落た仕上がりになっている。装幀のデザインを各巻異装にしたのは、上の安田の表紙絵の例があるが、今回は文字デザインとも言うべきもので、同じ効果を上げている。川端に題字だけでなく装幀もと言われた町は、全巻完結までの「一年ほどは、心配で夜を眠れないほどだった」^(註9)と回想している。この成功もあって町は、里見弴、舟橋聖一、三島由紀夫など多くの作家の装幀を手がけるようになり、有吉佐和子などは「名指しで、その作品の装幀をほとんど町春草に任せ」^(註10)たという。1ヶ月に1冊の割合で定期的に刊行を終える。作品を精選し、小振りで瀟洒な装幀でもあり、最も川端の作品にふさわしいできあがりといえようか。

C 『川端康成全集』全12巻。A 5判。388ページ～440ページ。1959年11月～62年8月。

約1年間で順調に10冊を刊行した後、2年がかりで残りの2冊を出して完結する。川端の全集の中では最も判型の大きいものである。全巻同一の装幀で、箱の一方には「川端康成全集」「新潮社版」と大型の活字で記し、反対側には全作品名をやや小型の活字で記す。表紙が赤、背文字の部分が白のツートンカラーであるが、特別に洒落たものではない。背表紙の活字も金文字は使っているがデザイン的には平凡であるといえよう。要するに、これまで、装幀にも意を用い、小振りの洒落た全集や選集を出してきた川端のものとしては、大きさといい、意匠といい、全く異質なものであるといえる。過去の全集や選集と比べても、このころ同じ新潮社から刊行された『富士の初雪』や『みづうみ』などと比べても、川端本の装幀としては極めて地味な本作りであると言わざるを得ない。「作品の配列は編年体を原則とし」「決定版全集として企画した」^(註11)という事情であれば、そのあたりの一種の力みのようなものが、洒落た装幀を忌避させたのかもしれない。

注目されるのは、1955年に単行本として刊行された『みづうみ』は収録されているのに、同年刊行の『東京の人』が収載されなかったことである。西日本新聞などに連載当時から好評を博し、単行本でもロングセラーとなり、西河克己監督で日活で映画化されたり、三浦洸一の歌など、社会現象と言ってもよいようなブームを招来した作品である。この原稿が明治古典会に出陳され人気を集めたことも知られている^(註12)。原稿自体は、現在では聖徳大学の所蔵に帰しているようで、最近、同大学の川並記念図書館の近代文学の作家の原稿展に出品されている。この展示作品はインターネットでも公開されており、美しい画像

で生の原稿を居ながらにして見ることができる^(註13)。図書館主催の展示の一つの理想的なスタイルを示すものである。さて、『東京の人』の新潮社からの単行本も、55年からの4冊版が金島桂華の装幀^(註14)、57年からの縮刷3冊版が橋本明治の装幀と、表紙の絵も含めて忘れられない見事な本作りであった。1959年には、競い合うように、新潮文庫と角川文庫に加えられ、特に新潮文庫では63年、66年の新潮文庫夏のキャンペーン作品として選んでおり、長期にわたって一種のドル箱であったといえよう。59年には既に講談社の『現代長編小説全集』に収録されているから、新潮社としても防衛上この作品を全集に収録することが望ましかったはずである。それだけにこの作品を全集に含まなかったのは、川端の意のあるところではなかったろうか。通俗性の強いこの作品は、同じ傾向である『女であること』と共に、生前は決して川端自身の全集に取られることがなかったのである^(註15)。

D 『川端康成全集』全19巻。A 5 変型判。382ページ～480ページ。1969年4月～74年3月。

川端康成の生前に企画された最後の全集である。最終的には全19巻の形であるが、当初は15巻の予定であった。第14巻刊行後、川端が死去したため、4冊を追加して19巻となった。そのため、14巻までは69、70年の刊行だが、その後3年の空白を挟んで、73、74年に、15～19巻が刊行される。一見、5年間という長期の刊行のように思えるのはそのためである。本の大きさは、天地のみが通常のA 5判よりやや小さいため、幅広の印象を与える。Cの全集と横幅は同じだが、天地のみが約1.5センチ小さい本である。装幀は赤い布表紙にクリーム色の箱で、AやBのような洒落た装幀ではないが、箱全体に更に紙のカバーが掛けられ、これに書家の松井如流が流麗な筆致でそれぞれの巻の代表的な作品名を揮毫しており、Cの全集のような地味な印象はない。11巻あたりまでの構成は、大体Cの全集と同じで、これにその後の10年間の作品などが多少加わる。『東京の人』や『女であること』が収録されないのもCの全集と同じである。没後に追加が決定された4冊は『文学時評』である。

Cの全集との類似性について見ておこう。比較しやすい、収録作品の少ない、第7～第9巻の例で述べる。第9巻は、Dの全集では『舞姫』が7ページから232ページまで、『たまゆら』が233ページから249ページまで、『冬の半日』が251ページから262ページまで、『少年』が263ページから370ページまで、『岩に菊』が371ページから382ページまで、そして白紙2ページ分を挟んで奥付となる。この作品配列、ページの割付、1ページの行数、1行の文字数、すべてCの全集と完全に一致する。これは、『再会』『反橋』『夢』『しぐれ』『雨の日』『住吉』

『地獄』『北の海から』『虹いくたび』『再婚者』の10作品である第9巻でも全く同じである。これに対して、第8巻はCの全集は427ページ、Dの全集では509ページと分量も随分違い、一見無関係のようである。しかし、Dの全集では、『千羽鶴』が7ページから143ページまで、『波千鳥』が145ページから226ページまで、『山の音』が227ページから509ページまでとなっており、これに対して、Cの全集では『千羽鶴』が7ページから143ページまで、『山の音』が145ページから427ページまでで、要するに『千羽鶴』の未刊の続編である『波千鳥』の分をそっくり抜くと、ここでもページの割付まで完全に一致するのである。このようにCとDの全集には相関関係が大きいことを押さえておきたい。

E 『川端康成全集』全35巻、補巻2。四六判。477～821ページ。1980年2月～84年5月。

山本健吉、井上靖、中村光夫の三氏の編纂になるもので、「ノーベル賞作家の業績を完全なカタチで遺すべく」^(註16)、決定版全集として企画されたもの。当初の3年間で第34巻までをほぼ毎月刊行の形で進め、第35巻と別巻の2冊のみが、83、84年の刊行である。全作品をジャンルや分量や発表の有無等で細かく部類分けし、その中ではほぼ発表年代順に並べる。未刊行作品や書簡類が初めて取られたのは当然だが、従来の全集には含まれることのなかった、長編『東京の人』『女であること』なども今回初めて収録された。少年少女小説や、『雪国』『名人』が初出の形態でも取られているのが注目される。

この全集は、1999年に、川端康成の生誕100年を記念して、特別復刊された。

3

さて、前節で見た、川端康成の全集を Webcat で検索すると、どのような情報が得られるであろうか。

NACSIS Webcat の総合目録データベース WWW 検索サービスのページで<タイトル・ワード>の項目に、「川端康成全集」と条件を入れると、<簡略表示>として、次の6件が表示される。

1. 川端康成全集 / 川端康成著；川端康成記念会編；第1巻-第30巻。-- 新潮社，1980
2. 川端康成全集 / 川端康成著。-- 新潮社，1969
3. 川端康成全集 / 川端康成著；第1巻-第14巻。-- 新潮社，1959
4. 川端康成全集 / 川端康成著；川端康成記念会編；第31巻-補巻2。-- 新

潮社, 1980

5. 川端康成全集 / 川端康成著; 第1巻-第16巻. -- 新潮社, 1948
6. 川端康成全集 / 川端康成著; : set-補巻2. -- 復刊. -- 新潮社, 1999

<1>と<4>はひとまとまりのデータが二つに分かれただけで、<6>はその復刊である。これは前節のEの全集に該当する。<5>は冊数と刊年からAの全集であることが分かる。<2>は冊数が示されていないが、刊年から推測して、Dの全集であると思われる。実際、<2>を<詳細表示>してみると、「1969-1974」「19冊; 20cm」というデータが出てきてこの推測が正しいことが裏付けられる。問題は<3>であって、刊年から言えばCの全集かと思われるのだが、あれは12冊の全集であったから、冊数が相違する。また14冊の全集というのも、従来知られていないものである。59年から刊行された『川端康成全集』は従来の12冊のもの以外に、14冊のものがあつたのであろうか。またこのデータでは、Cの12冊の全集が出てこないのはどういうわけであろうか。そこで、<3>のデータを<詳細表示>させてみると、今回は次のような情報が得られる。

「新潮社, 1959-1970」「22cm -- 第1巻-第14巻」

すなわち、1959年から足かけ12年間を費やした全集で、全14巻であるというのである。刊行開始年次や、本の大きさはCの全集と一致するのであるが、刊行終了年次は全く異なり、更に最大の相違として、全巻の冊数の違いがある。

そこで<詳細表示>のデータを丹念に見ていくと、面白い傾向に気が付く。<詳細表示>画面では、その書籍を所蔵している機関の数とその名前、そして多くの場合は、その機関における函架番号などのデータが得られる。この14冊版の『川端康成全集』についても、フェリス女学院大学、岩手大学以下40の機関に所蔵されていることが分かる。そしてそのうち37の大学には第12巻までしか所蔵されておらず、13巻以降を持っているのは僅かに3大学に過ぎないのである。もちろん37の大学全部に12冊がそろっているのではなく、1冊もしくは数冊の欠本がある大学や、逆に数冊のみしか所蔵していない大学もある。その一方で、北は藤女子大学、岩手大学、東北大学から、東京大学総合図書館、鶴見大学、実践女子大学、立教大学、山梨県立女子短期大学、神戸大学人間科学部、九州大学六本松分館等々、18の機関では第1巻から第12巻までがずらりとそろっているのである。これに欠本のある大学19を含めて、総計37の機関は12巻までしか所蔵していないのである。やはり12冊というのが本来の冊数なのではないだろうか。

では、13冊目以降を所蔵している大学はどのようなデータなのであろうか。

それは、九州芸術工科大学、北海道教育大学附属図書館函館分館、梅花女子大学の3機関であって、このうち、九芸工大は第13巻のみの端本を所蔵しており、北海道教育大と梅花女子大は1巻から14巻まで所蔵というデータが得られる。これら3つの大学について、直接オンライン検索などで確認してみよう。

NACSIS Webcat では、九州芸術工科大学には、14冊版の全集のうち第13巻のみが所蔵されているというデータがあった。「第13巻 918.68 || Ka91 || 13 1170002060」というのがそれである。そこで、OPAC で九州芸術工科大学の図書館の蔵書を直接検索すると、簡易検索で14件ヒットしたが、第1件は1969年版の全集で、2件目から14件目まではこの69年から刊行の全集のうち、なぜか第13巻のみをのぞく、第1巻から第14巻までの各冊の個別のデータである。69年版の全集の方は、NACSIS Webcat のデータ<2>の中にも所蔵機関として、芸工大の名前が出てくるから、情報としては矛盾がない。しかし、59年版の全集や、第13巻というデータは出てこない。

次に、第1件目を詳細表示させると、今度は第13巻を含む14冊の個別の書誌情報が得られる。しかしそれも、1959年からの全集ではなく、69年からの全19巻の全集のうちの第1巻から第14巻までのものなのである。すなわち、九州芸術工科大学には、59年から刊行の全集は一冊も所蔵されていないのである。念のため、Webcat の情報と巻数が一致する第13巻目について、九芸工大側の、書誌情報を見てみると、所収されている作品名は『伊豆温泉記』『末期の眼』などであり、そのほかの情報も、「出版事項：東京：新潮社，1970.3」「形態：415p: 図版；20cm」「シリーズ名：川端康成全集 / 川端康成，第13巻」などと出てきて、紛れもなく19冊版の全集のうち第13巻である。ここで注目すべきは、芸工大の所蔵情報である。「図書 ID：1170002060」「請求記号：918.68 || Ka91 || 13」とあるが、これは実は Webcat の、59年版第13巻とされているものの番号と両方とも完全に一致する。すなわち、両資料は同一のもので、芸工大側のデータでは正しく69年版の全集の第13巻と記されているが、これが Webcat の情報となるとときに誤って59年版の全集のデータに吸収されてしまったのである。九州芸術工科大学には、59年版の13巻の全集は存在しないという結論になる。

次に、北海道教育大学附属図書館函館分館の例を見てみよう。

ここも直接 OPAC で、函館分館のデータを検索すると、今回は間違いなく「出版 東京：新潮社，1959-1970」「形態 冊；22cm」などという形で、1巻から14巻までの全集が出てくる。ところが、同じ書誌情報では「刊年 1959-1962」

とも出てくるのである。出版と刊年が違うのをどう考えたらよいか。再版以降のものが混じっているのであろうか。たしかに資料 ID を見ると第 1 巻が「211040337」で、第12巻が「211046435」で、番号の相違は<0337>～<6435>と下 4 桁の範囲であるが、これが13巻になると「211101134」14巻が「211101135」と相違は下 6 桁の<046435>～<101134>と、一挙に大きくなる^(註17)。刊行された時期、購入された時期、少なくとも函館分館で登録された時期が、12巻以前と13、14巻との間には、かなり開きがある可能性がある。大いに疑問が残るが、所収作品名がオンライン検索では確認できないので、結論は留保し、残る一校を見てみよう。

次に梅花女子大学の蔵書情報について検討する。

ここも直接 OPAC で、梅花女子大学・短期大学の図書館のデータを検索すると、1980年版の川端康成全集が 2 件、1959年版の全集が 1 件出てくる。ただし、最初の 2 件は同じものが 2 セット入っているのではなく、30巻までと、31巻以降とが、別書誌として分けられたものである。これは、上述の NACSIS Webcat の簡易表示でもやはり分割されていた。梅花女子大学の検索結果では、同一セットの別書誌であることが明示されており、親切である。

さて、59年版の全集の図書目録情報を開いてみると、書誌情報として次のようなものが示される。「書名 川端康成全集」「出版 東京：新潮社、1959-1970」「刊年 1959-1962」「形態 冊；22cm」ここでも、北海道教育大学の例と同じように、出版と刊年のずれがあることが注意される。梅花女子大学の所蔵情報は、巻号、所在、請求記号、資料 ID、状況（返却予定日）など多岐にわたる。特に、所在では、「4階(北)」などと書架の位置が示され、貸し出し中のものは返却予定日と更に次の予約が入っているかまでが一度に出てくる、極めて行き届いたシステムである。この所蔵情報によれば、梅花女子大学には『全集』の第 1 巻から第12巻までは 2 冊ずつ、更に第13巻と第14巻が 1 冊ずつ所蔵されていることが分かる。注目すべきは資料 ID である。重複している12巻までのうちの 1 セットは<6407529>から<6407540>までの連番となっている。おそらくこれは一括購入という事情によるものであろう。番号の上 2 桁が西暦を示すとすれば1964年のこととなり、59年版の全集は62年に完結するから、それをまとめて購入したのが64年ということになろうか。こうして59年版の全12巻の全集の所蔵が確認できる。

次に、12巻までのもう 1 セットと13巻、14巻の検討に入ろう。資料 ID を目安にすると、この14冊は概ね近い数字であり、これも一連の購入と分かる。ただし先程のセットのように完全な連番ではなく、第 1 巻の<6913049>から第14

巻<7013699>までで、西暦年数を表すと思われる上2桁を除き、下5桁で見ると<13049>から<13699>までの、前後約650の番号の中に入る。恐らく、69年から70年にかけて出版された順に順次購入登録されたものであろう。この14冊が69年から70年にかけて出版されたとしたら、それは69年版の19冊の全集の第1巻から第14巻までの刊行時期とほぼ重なる。すなわちこちらのセットは、59年版のものではなく、69年版のものと思われる。これが59年版の12冊と、データの上で一緒にされる段階で、謝って共に59年版と認識されてしまったのではないだろうか。大学図書館などでは予算に余裕があっても、同じ版の個人全集を2セット入れることは考えにくい。寄贈の可能性はゼロではなかろうが^(註18)、資料IDの番号が大きい、すなわち後から登録された14冊の方は、一括ではなく、一定の間隔で登録されているから、これは寄贈図書ではない。とすると、59年版の全集のあるところに、新たに69年版の全集を購入したと考える他はない。すなわち梅花女子大学には、1959-1962年出版の全12冊の全集と、1969-1970年出版の14冊（全19巻の中の14巻まで）の全集とが存在し、前者が「刊年1959-1962」というデータとなり、2セットを合わせた実際の出版年が「出版東京：新潮社 1959-1970」というデータとなったのである。

では、69年版の全集は全巻で19冊なのに、どうして第14巻で購入が止まっているのであろうか。北海道教育大学も14冊目までであった。この奇妙な符合はなぜであろうか。

それは、Dの全集の刊行年月と深い関わりがあると思われる。前節で見た如く、Dの全集は第14巻を刊行した後、川端自身の死という、思いがけない事態のために、そこで刊行が頓挫してしまった。更に、編集方針を変更し、文学時評を収載する4冊を追加するということもあったために、第14巻の刊行後、第15巻の出版までに、約3年間の空白期間が生じてしまったのである。そのために図書館によっては、購入の継続が途切れてしまったところも出たのではないだろうか。予約出版などでない限りは、納入していた書店がきちんと情報管理をしていないと、決してないとはいえない出来事である。現実には、古書店の目録などでDの全集が掲載されているとき、時折14冊単位で売られているのに遭遇する。筆者の乏しい経験では、15冊単位というのではないが、14冊というのは数回見かけたことがある^(註19)。個人でも、図書館などでも、Dの全集の14冊のコレクションというのが、ある程度存在するのではないだろうか。このことが、今回の誤解に拍車を掛けたと思われる。19冊ひとそろいのものであれば、Dの69年版の全集と認識されたであろうが、14冊という全集はもともと存在しないから、Cの59年版の12冊の全集に追加されてしまったのであろう。

しかし、たとえ刊行年月の間隔が誤解を生じやすかったとしても、59年版の

全集と69年版の全集を混同するようなことがあるのであろうか。そこにはもう一つ別の要素が存するのである。それは、この2種類の全集の外形的な類似性である。

川端の全集の中では、CとDの全集だけがA5判という大きな判型であり、縦の寸法こそ約1.5センチの相違があるが、横幅は全く同じであった。さらに、前節で見た如く、各巻の内容はほぼ完全に重なるのである。前節では、第7巻から第9巻までを見たが、あれは完全に重なるものと、部分的に重なるものを分かりやすい形で示したのであって、実は完全に重なる巻の方が圧倒的に多いのである。『伊豆の踊子』を含む第1巻から、『雪国』を含む第5巻、『名人』を収載する第10巻等々、第8巻を除けば第12巻までは、ページの割付まで一冊丸ごと重なってしまうのである。このように、Dの全集は、いわばCの全集を母胎として作られたものともいえるから^(註20)、一つのものと同一視される、混同される可能性は元々大きかったのである。

ここで先程留保した北海道教育大学の例に戻れば、資料IDの12冊目までと13冊目以降との番号の開きが改めて注目される。これは59年版の全12冊の全集がそろっているところに、69年版の全集の13、14巻のみが加わったという事情なのではないだろうか。あるいは、12巻までの内容はほぼ同じであるから、新しい全集の13、14巻のみを追加したという事情でもあるのかもしれない。

かくして、1959年から刊行された全14巻の『川端康成全集』というものが、書籍情報、蔵書情報というデータの上で誕生したのである。同時にもう一つ見逃してはならないのが、この14巻の全集という、いわば誤情報が誕生すると、本来的な正しい情報である、59年から刊行された全12巻の全集のデータが、全14巻の全集の一部という形に吸収されてしまい、消え失せてしまったことである。冊数の情報として、大が小を呑み込むような形で、正しい情報は雲散霧消してしまったのである。従って、NACSIS Webcat 上では、59年版の12冊の全集は見かけ上存在しない形になっているのである。

4

NACSIS Webcat に見られた、1959年から70年に掛けて刊行された、全14冊の『川端康成全集』とは、現実には存在するものではなく、59年からの全12冊の全集とそれから約10年後に計画された19冊版の全集の中、70年までに刊行された14冊までのデータが合成されて作られた、いわば架空の全集であった。その背景には、12冊版の全集と、19冊版の全集の骨格部分の類似性や、19冊版の

全集が14冊目で一時刊行がストップするといった特殊な事情が重なったことがある。

しかし、個別に作成されたデータを集積して、総合的なデータに切り替えるときには、このような誤謬が発生することは皆無ではない。ただし、そのような誤謬の可能性があるにせよ、データを集積して、横断検索が出来るようにすることの方が、遙かに大きな意味がある。また第2節の聖徳大学川並記念図書館図書館の例で見た如く、Web上の情報は、空間の距離をいとも簡単に超えて、すぐれた情報を共有させてくれるのである。

従って、データ集積の際の誤謬をいかに少なくするかという研究が今後必要になろう。そのためには、個別の図書館が提供する情報を、より詳細にする必要があろう。図書館の目録作業の重複を回避できる共同分担方式なればこそ、個別の情報の精度が一層求められる。一旦誤った情報が入ると、全国的な規模で増殖してしまうのである。そのようなことを防ぎ、一層充実した総合目録、総合書誌を全国規模で構築するためには、隣接諸分野の学問のノウハウを援用することも必要であろう。日本の古典文学や、西洋の書誌学の方法などで応用できるものもあるかもしれない。本の大きさも、縦のみならず、横のデータも必要かもしれない。本の厚さという情報は、今後の収蔵スペースを考える上で有益であろう^(註21)。また、図書館では、箱や表紙のカバーは取り去られることがふつうであるから、むしろ逆に、これらの情報こそ、NDCに遺しておくべきだという立場もあろう。書籍情報の今後には、様々な工夫の余地があると思われる。本稿はそのようなことを考える契機になればという思いで書かれたものである。

注

- 1 農林水産研究情報センター研究情報課作成。伊井春樹編『日本文学どっとコム』(2002年5月、おうふう) 70ページでも、このサイトが取り上げられている。
猶、後述する如く、東京工業大学のサイトがすぐれているのは、「NACSISの直接の祖先」である東京大学文献情報センター時代に、目録所在情報システムに最初に接続した(宮澤彰『図書館ネットワーク—書誌ユーティリティの世界—』4.1.3。2002年3月)ことから伺えよう。
- 2 「角川版」という名称には若干問題があるが(別稿「角川書店の昭和文学全集」を準備している)ここではWebcatに従って、仮にこの名称を使用した。
- 3 フェリス女学院大学、跡見学園女子大学短期大学部、藤女子大学の3機関である。
OPACでこれらの大学の蔵書を直接調べても、当然「451ページ」という情報が出て

- くる。
- 4 一冊本の作品集や、未完結のものは本稿の考察の対象ではない。従って、芹沢銈介の装幀と菅虎雄の題簽も見事な1934年の改造社版の『川端康成集』は第1集のみで中断したため取り上げていない。一冊本の作品集は多いが、編集と造本にすぐれているのは、講談社の『川端康成短編全集』(1963年)と、集英社の自選集のシリーズの中の『川端康成自選集』(1966年)であろうか。前者は、最近、室生とみ子や福永武彦への献呈本が古書目録を飾った(『浪速書林古書目録』33号、2002年6月)。後者は同シリーズの中でも、三島や志賀と並んで、現在でも人気を博していて発売時定価の10倍以上の古書価格が付いているようだ。猶、集英社のこの自選集は各千部限定であるが、志賀直哉のものだけ発行部数が少ないため稀覯性が強いかもしれない。実際には、川端・三島がこのシリーズの人気の双璧といえようか。
 - 5 最近のものとして『文学堂書店古書目録』の例を挙げれば、芹沢銈介装幀版35万円(16号、1995年)、林芙美子装幀版10万円(20号、1998年)、共に美本、というのがある。
 - 6 この年、細川書店から「旅の風景」「心の雅歌」の上下二巻からなる『川端康成集』も刊行される。上巻の「あとがき」によれば「五十歳までの自分を記念しながら(中略)手頃の選集をまとめてみようとした」もので、細川書店本の代表作の一つともされるものである。
 - 7 76年10月刊行、限定300部、定価60000円。
 - 8 この原稿は「祝明治百年古書公開展観大入札会」に出陳されて、評判を集めた。目録47ページに記事が、52ページに写真が載っている。底価27万円、落札価40万円強。
 - 9 町春草『書藝の瞬間』『装幀開眼』(1973年12月、学藝書林)
 - 10 町春草『墨の舞』(1995年12月、日本放送出版会)
 - 11 『新潮社100年図書総目録』(1996年10月)
 - 12 『東京の人』のほぼ揃いの原稿(全505回中、29回分欠)は、明治古典会の「文献百年古書展観大入札会」(1967年12月)に登場して、耳目を集めたが、『入札目録』35ページに記事が、73ページに写真が掲載されている。翌68年12月の「祝明治百年古書公開展観大入札会」(於西武百貨店)は、明治百年という事もあって空前の規模となった。目録も写真版144ページ記事106ページ全250ページの、前例のない大部のものであったが、この目録で巻頭写真(表紙の見返し)に使用されたのが『東京の人』第一回目の原稿である。本文中でも全出品中3点のみがカラー写真で紹介されているが、漱石の描いた「盆栽と瓶」の絵画などと共に『東京の人』の原稿が取られている。他の2点は絵画資料であるだけに、この原稿の扱いの重々しさが分かる。今回は、約2000枚の原稿は、36冊の美しい和装本に装幀され、美しい緞子の帙入りに改装されていたこともあって、当時としては他に例のないような300万円という高額な底価が付けられていた。勿論この年の出品の中での最高価である(200点前後一括入札の特別出品2件は除く)。結局、350万円強という、当時としては破格の値段で落札されたが、同時に出品された、川端本の優品の代表格、江川書房版の『伊豆の踊子』が6万円、11万円(後者は署名入)で落札されたことを考え合わせると、川端関係の資料の中でも、

際だった高値の程が推測されよう。

大揃いのものから分離した原稿も、連載1回分(4枚)単位で、しばしば明治古典会の市場に登場している。手許の乏しい資料による限りでも、1966年の大入札会(於主婦の友社新館3階)の際、2万円強で落札されたのをはじめとして、ほぼ毎年のように例会や大入札会を賑わし、70年12月の大入札会では、第466回の分が単独で、65000円強で落札されるに至っている。(出品の記録や落札価格は、明治古典会の『落札価格年報』による)

- 13 <http://www.seitoku.ac.jp/lib/genkoten/kawabata.html>

猶、注12で述べた明治百年記念の大入札会で、『東京の人』と並んで注目を集めた尾崎紅葉の『浮木丸』の完全原稿2巻、底価100万円も、現在では聖徳大学の所蔵のようで、この原稿展に同じく出品されているのも、奇しき因縁といえよう。

- 14 この縁で川端は、『金島桂華画集』(1971年、便利堂)の冒頭に、「金島桂華氏の芸術」という一文を寄せている。

- 15 別稿「講談社の『日本現代文学全集』とその前後」参照。

川端自身は、注14書で、次のように述べている。

金島桂華氏に私の小説「東京の人」の装幀画を描いていただいたのは、昭和三十年のことであった。長たらしい作品で四巻となったが、各巻についてそれぞれ別の挿画を見た時、私は桂華氏にありがたさと恥づかしさを感じたのを忘れない。椿、あやめ、柿、菊、その四つの挿画は四季を現はし、桂華氏をほぼ一年煩はせたのであった。「東京の人」は新聞に連載の通俗小説で、桂華氏の清雅な絵には値ひしさうにもなかつた。

- 16 注11書。

- 17 このIDはNACSIS Webcatでも確認できる。

- 18 たとえば、福岡女子大学附属図書館には、筑摩書房『現代日本文学全集』の元版と、定本限定版とが所蔵されているが、もともと定本版しかなかったところに、元版が寄贈されたものである。講談社の『日本現代文学全集』も、元版と豪華版があるが、豪華版の方は本年(2002年)の寄贈によるものである。

- 19 最近の例では、『日本古書通信』(67巻10号、2002年10月)のARS書店(札幌市東区9)の目録に「30、川端康成全集 全14 新潮社 69 14冊 10000円」というのがあった。

- 20 共通する作品は、活字のポイントも、字高も同じであるから、Dの全集はCの判型をそのまま利用したところもあったかもしれない。

- 21 吉田昭「本の厚さ」(『図書館雑誌』96—6、2002年6月)

(2002年9月30日稿)

(後記) 本稿は、福岡県・佐賀県大学図書館協議会の研究発表(2002年9月13日、於福岡女子大学)を基に、大幅に加筆したものである。席上、有益なご意見を賜った関係各位に御礼申し上げます。また、拙文「幻の川端康成全集、幻の博物館」(福岡女子大学『図書館ニュース』10号、2002年3月)の一部も吸収している。

猶、NACSIS Webcat や、他の Web 上のデータは、2002年9月20日現在のものである。

入稿後、『川端康成 文豪が愛した美の世界』展(2002年10月～、サントリー美術館、京都文化博物館)を見ることを得た。没後30年の記念の企画にふさわしく、川端文学の世界と美との関わりを多方面から窺うことのできたすぐれた展示であった。本稿との関連で言えば、安田靫彦の「『川端康成全集』表紙画画帖」がやはり眼を引いた。16冊版の全集そのものも横に並べられ、安田の表紙絵を見ることができたが、安田の題字が金文字で刻まれた濃紺の揉み紙表紙も併せて展示してほしかった。